

## ミツバチとの対話 —蜜源—

岡田 一次

昭和 25 年 (1950), 私たちは玉川大学農学部で研究用としてミツバチ (*Apis mellifera* L. 西洋蜂) の飼育を始め, その後, 私は丘の住宅地の自宅の庭でもニホンミツバチ (*Apis cerana japonica* Red. 日本蜂) を飼っていた. 平成 5 年 (1993), 相模原市内のマンションに引っ越しを実行した. 既に 3 か年の歳月が流れ, その間, 蜂の不思議な野外生態にも出会った. 自己流に表現すれば, 「ミツバチと蜜源を中心とした対話が少しばかり出来た」ように実感する.

一方, 街の食品店 (スーパーマーケット) へ出かけてみると, ハチミツ関係の売場は非常に狭く, 国産品の姿は淋しい. 世界経済界の大混乱時代の現象であろうが, 異様な感じを受ける.

日本各地はもともと養蜂の適地であるから, 少し遅すぎるかも知れないが, 現在の時点からみた, 新養蜂諸問題の再検討が必要ではなからうか. 私は蜂たちにも聞いてみたい.

### I 野外観察

ミツバチの野外観察を行う場合, 先ずデータが偏らないように, 地域の環境, 生物の一般状況, 近縁の昆虫類の動勢などを重視する必要がある.

ある. ミツバチについても, 日本在来のニホンミツバチと, 輸入後 100 年以上の歴史をもつセイヨウミツバチとの相違の指摘が必要なほか, 当地には少ない主要蜜源—レンゲ, ニセアカシア, トチノキ, ミカン, の大栽培地のことなどを討論の中で忘れてはならない. 私の眼にふれた蜂の訪花実例を略記してみよう.

#### A. ニホンミツバチの訪花

街の人家の庭にはウメ (梅) の木は比較的に多く, 花にはニホンミツバチは幾らか見うけられる. サクラは方々にあるが, 木は高いため蜂との関係は分かりにくい.

黄色の菜の花畑は 3 月下旬頃, 畑地帯の処々に眼につく. 以前, 日本各地で栽培された菜種油用のナタネ *Brassica campestris* L. とは植物の種類が違うほか, 蜂の飛来は弱く, 花蜜採取は物足りない感を受ける.

紫色のアラセイトウ *Matthiola incana* R. Br. (図 1) は一般には見受けませんが, 田名の市街地の一角に僅か 20 株ほどが開花していた. ここに日本蜂が飛来しており, 不思議に感じた. 玉川の丘では和洋両ミツバチの訪花は優れていたもので, 全国的な蜜源にはならないかと, 私は常々期待していた.



図 1 ニホンミツバチの蜜源. 左からアラセイトウ, ヤブカラシ, セイダカアワダチソウ

ネギは市内のあちこちの畑にも多く栽培されている。4~5月頃、坊主形の花には蜂はよく飛来し、ゆっくり採蜜する行動が目立つ。

ツタ、ノブドウは人家を囲む塀にからみつく。蔓に白い花をつけ、葉にかくれて目立たないが日本蜂は案外、頻繁に訪れる。私は今まで西洋蜂の飛来を見たことはない。

ヤブカラシは8~9月の暑い頃、木や草や垣根などに蔓を巻いて小花をつける雑草(図1)。人目には目立たないが和洋両ミツバチのほか、アシナガバチ、スズメバチ類などの昆虫の飛来も多い。私がこの花の前に立って常に思い出すことは、徳田義信博士が晩年、この植物の蜜源としての重要性を力説された話である。ある時、他県の見知らぬ人から、種苗の入手を頼まれたことを思い出す。大先輩の発言通り、夏の蜜源の少ない時期の花としては確かに有力であるが、雑草としても目立つ。

セイダカアワダチソウ 一時は全国的に急に増えた有名な雑草(図1)。秋の頃、草丈の高い頂上に小さな黄色花が群がって咲く。どういう訳か、近年急に減少している。和洋両種ミツバチは特によく訪れ、花蜜と花粉の両方を採取する。越冬用の餌として極めて有用であるため、養蜂家の中には有益蜜源植物と評価する人も多い。少数であるかも知れないが、この花の蜜が春になっても巣板の中に残ると、重要なレンゲ蜜の採取に悪影響があるという話も耳にした。思いがけない悪条件の地にもこの植物は育ち、雑草としての生命力は抜群である。

## B. セイヨウミツバチの事例

相模原市近郊では西洋蜂が訪れる蜜源花の種類は日本蜂の場合よりも目立って多い。野生化している西洋種の話は耳にしないので、恐らく付近にこの蜂の飼育者が居られるに違いない。

タンポポ 道ばたや人家の空地に春先きの頃、どこでも目につく蜜源植物である。モンシロチョウが飛んでおればそこには西洋蜂もよく飛来している。花上で吸蜜する蜂の行動は予想外に落ち着きがないところを見ると、吸蜜量は余り多くないのかも知れない。しかし、場所に

よっては花数が相当多いので、春先きの蜜源植物としては重要種と言えよう。

ユズ 相模原市は神奈川県では北部に当たり、海岸線から少し離れている関係か、ミカン類の栽培が予想外に少ない。しかし人家の庭を中心にユズ(図2)は所々にあって西洋蜂の訪花は見られる。空き地に咲くユズの花の例では、他の植物の花と比較して蜂の訪花数は目立って多く、蜂のこの花を好む性質がよくわかる。

ホワイトクローバー 相模原市付近ではどこにもあるが、相模川近くの空き地には群がって生えている。花期は5~6月が中心で、残花は9月頃まで見られる。今さら述べるまでもなく有名な蜜源植物であるが、「クローバ蜜」という商品名で販売される例はほとんどない。「本州は暖地であるから流蜜が弱い」という話は一般的で、確かな実験値はでていないのではなかろうか。西洋蜂の飛来は多く、吸蜜時間も比較的長いことが目につく。葉は幅が広く、緑色は美しいのでこの地に生えていても嫌気は起きず、全国的に勢力を拡大させてほしい。

ネズミモチ 人家の囲りなどに多く見受けられる(図2)。花は小さく、群がってつき、白色、和洋両ミツバチの飛来は多い。蜂は花の前の空中で定位することがあり、後肢上の花粉ダングは中肢も手伝って落下を防ぐ。

樹の高い類似種は多く、蜂の訪花は頻繁であるが、和種か洋種かの区別は人間の肉眼では見分けにくい。

ヒマワリ 夏の頃、人家の近くから畑の中まで大きな黄花を堂々とつけ、虫の飛来をさそっている。西洋種はこの花には多く飛来し、時には一つの花上に何匹もの蜂がいるが、なにぶんにも花が大きいため蜂の姿は目立たない。蜂は花上でゆっくり吸蜜し、後肢に大きな花粉ダングもつける。私は今まで、ヒマワリ蜜という名前を聞いたことがなく、販売にはいたらないようである。

サルビア 外国の養蜂参考書をみていると *Salvia* という文字がよく出ているが、どの種類が代表的か分かりにくい。日本にも同属は何

種もあって、一般には秋咲く真紅の花を思い出す(図2)。全国的にこの花は多いが、西洋蜂の頻繁な訪花に出会った経験がない。先年(1994)、田名北小学校の校門内の花畑に何匹かの西洋蜂が熱心に訪花し、観察もよくできた。蜂の花上に留まる時間は比較的長く、中には細い花管に潜って吸蜜する個体もいた。この光景が一般か、例外か、今でも私の疑問は解けていない。

キク 秋になると日本国中がキクの花で彩られる。花の形、色など様々で、個性ある変化に富む(図2)。しかし、人間が好むと反対に、昆虫類の訪花は少ないのは何故であろうか。ハナアブの例とは違い、西洋蜂は時々訪れる。相模原市付近では私の眼にはとまらないが、この花には場所、時によって蜂の飛来が多いことが知られ、これを相当重視する養蜂家もおられる。

コスモス 全国的に広く栽培される秋の花。日本蜂は目立たず、私の手元に写真はないが、西洋蜂はよく訪花し、花粉ダングをつけるものが多い。越冬前の蜜源としては重要である。

その他 蜜源植物の一般論としては重要な種類は幾つもあるが、相模原市付近における3年間の私の調査では、あまり眼につかなかった主なものとしては、トチノキ、クリ、ビワ、ソバなどがある。足を伸ばして調べれば、どこかで

出合いそうにも思っている。

## II ハチミツ雑感

先日、朝日新聞を見ていたら、山陰地方の鳥取県などで「水田にレンゲ栽培を復活させ、これを地中にすき込んで地力の更正を計らないと、化学肥料農法では最早、お米の正常生産は望めない」となっており、既に一部で実行した地方もあった。しかし日本養蜂新聞を開くと、レンゲ畑にタコゾウムシ(アルファルファタコゾウムシ *Hypera postica*)被害が起き、栽培は大変な悪状態という話も大きく流れる。私は以前から日本各地で見られる美しいレンゲ畑に感動し、訪花するミツバチの力強い写真を多数持っている。理屈抜きで日本にレンゲ畑の盛況を続けて欲しい。レンゲ蜜の個性ある美味は世界に誇りうる最高品である。相模原市近郊では以前にはレンゲ畑を見かけたが、最近はどうなっているのか、私の眼には止まらない。

アカシア 昔も今も人気の衰えないハチミツはアカシア蜜であろう。日本各地にどこにもあるが、東北地方、特に秋田県などは産地として有名である。蜜源植物のニセアカシア *Robinia pseudo-Acacia* L. は日本の東北と緯度の同じルーマニア、ハンガリーなどにも多生し、良質の蜜が大量に採取されている。日本でも鳥取県



図2 セイヨウミツバチの蜜源。上段左から、ユズ、ネズモチ、サルビア、キク、アベリア、クロガネモチ

の砂丘地帯に植えられている例では、採蜜効果は結構良いようである。花も美しいので、場所によっては景観用としても十分に役立つ。こんな内容は誰でも分かっていることで、少しでも早く増産を実行したい。

ミカン類 暖かい地方の特産で、関東地方では南の海岸地帯が中心である。夏ミカンは寒さに強いのか、他の隣県でも所々に見かけられる。相模原市付近では経済性のある大規模栽培は無理であろうか。

イチゴ 30年ほど前から全国的に急発展したハウス栽培用のものに、花粉媒介用としてのミツバチの導入は欠かせない。ミツバチは花粉媒介用としてリンゴ、モモ、ナシなどの果樹管理にも大切で、その必要性は将来とも特に大きい。

クリノキ 方々において蜂の訪花は当然と思って歩いてみたが、不思議なくらい目につかなかった。初夏の補助蜜源として、多くあってほしい。

アベリア スイカズラ科の高さが1~2mの低木で、白い小花を多数つける(図2)。花期が長く、6~10月頃まで開花する。人家の庭の垣根や、小道の空地などにも植えられている。相模原市内の田名中学校の校門のものが人目につき易い。西洋蜂の飛来は多く蜜源として重要である。私はこの植物の増殖に期待をかけている一人である。1994年には多く飛来したが翌95年にはどういいうわけか、蜂の姿があまり見られなかった。近くに住む蜂の飼主が夏の猛暑を避けるため巣箱を涼しい場所へ移動させるのかと、勝手に想像している。日本の養蜂界にあたっては今後、この植物の補助蜜源としての価値について十分に研究することを期待したい。

その他 サザンカ、ツバキの花はかなり多く見られるが、蜂の訪花はほとんど眼に止まらないので、不思議に思っている。

### Ⅲ 蜜源—どうあれば良いか—

日本の古い養蜂文献を開くと、先人たちは「花あればミツバチは良く働き、養蜂は成り立つ」との名言を自信をもって認めている。現在、

私たちがミツバチの行動を見るとき、蜂たちは何物にも負けない働き者と直感できる。

蜜源について日本では従来「他力的」と表現できる面もあったが、この辺で合理性を加えた積極的な実行案はないものであろうか。愛知県一宮市の野々垣禎造氏は自宅の庭のクロガネモチ *Ilex rotunda* Thumb. に西洋蜂の訪花が目立って多いことに自信をもち、苗木を増やして付近に試植をした。私は雌苗を1本、雄苗を1本と2本の苗木を頂いて玉川学園の自宅の庭に植えていた(図2)。この植物の成長は早く、数年後には樹高が4m、5月頃には白の小花を多数つけ、その後、毎年毎年、花はよく咲いた。和洋両ミツバチの訪花は抜群で、蜂のうなる音が聞こえた。現在、私はこの蜜源植物を全国的に増やせないかと強く期待している。

加えて養蜂の現況には輸送難、蜂場確保の困難など、諸般にわたって条件の悪化が積みまわっている。

私が一番重要に感じていることは、せっかくの「生産物の売却」の問題である。諸外国から大量の品物が安値でどんどん輸入される現況である。商売上のことは余りにも重要で、私のような素人には分からない事柄であるから多言を控えるが、世界中の養蜂生産物が日本国内でも円滑に流通することはできないものか。

時代が進歩すれば、それに適した新たな効用解説が必要となる。国産のハチミツをよく食べてみるが、個性豊かな「香りと味」とを痛感している。蜂やさんのご苦労が身にしみる。レンゲ蜜、ミカン蜜、アカシア蜜など、どれも素晴らしい。優れたミツバチ生産物の正当な発展を祈って止まない。

(〒229 相模原市田名4112-1 ダイアパレス402)

#### 参考文献

春井勝. 1995. ミツバチ科学 16(3): 113-118.  
井上丹治. 1977. 新蜜源植物総説. アヅミ書房, 東京. pp. 253.

OKADA, ICHIJI. Dialogs with bees and honey plants. *Honeybee Science* (1996) 17 (1):19-22. 4112-1-402, Tana, Sagami-hara-shi, Kanagawa Pref., 299 Japan.